

私の留学体験談

3年1組28番 阿部心

1.はじめに

私は2年次の2023年の9月から2024年6月の約9ヶ月間カナダのキングストンに留学した。留学先のキングストンという小さな街は、1840年～1844年の4年間の短期間だがカナダの首都だった。自然景観と豊かな歴史、そして温かい人々が多く住む魅力的な場所だ。

2.序論

私が留学に行こうと思ったきっかけは、元々小学生の頃から、日本と似た文化の国ではなく全く違う文化に触れながら学校に通って生活してみたいと思っていたからである。中学生の頃はコロナ禍だった為タイミングを逃してしまい、高校生になってからもその思いがまだあった。その中で、テレビや授業などで世界ではもちろん、日本でもグローバル化が進んでいる。と色々なところで聞いた。そこで、日本の文化だけで生きてきた私と他の国の文化で育ってきた人とは明らかに視点の違う意見を持っていると感じた。このような点から国際的な視野を広げ、語学力だけではなく自分自身の考え方や見方を高めたいと思い留学を決意した。

3.本論

I 学校について

2023年の秋にカナダのキングストンに行った。実際行ってみると、日本との相違点は沢山あり、文化はもちろん、考え方なども似ている部分や全く違う部分があった。

まずは、学校生活である。カナダの学校では、制服がなく、授業では、日本の学校のように7時間授業ではなく4時間授業が、1コマの授業時間は45分や50分ではなく75分と少し長くなっていた。受ける授業はそれぞれで、新学期に個々の生徒スケジュールが配られ、その時点で前期後期の両方の授業が決まっている。その中で変更したい授業があれば担当の先生と相談し、空いてる授業へ変更することもできた。その授業も様々で、日本のような基本的な数学や理科のような授業から、ヘアスタイリングやエンジニアリングのような将来に繋がられるような専門的な授業があった。

クラスの中では日本とは違い、ひとつのクラスに様々な年齢の生徒がいた。日本の学校では、大学以外は同じ年齢の生徒が必ず同じ学年にいて自分のクラスがあるが、カナダでは同じ年齢でも違う学年の子が沢山居て自分のクラスがなかった。カナダでは、しっかりクレジットを取り、テストをクリアすると上の学年のクラスが受けられるという仕組みになっている為、年齢が下の子でも私よりも学年が上という場合もあった。この仕組みは、それぞれの学習能力にあったクラスが受けられていいと感じた。

また、4時間全て授業がある生徒が大半だが、空きコマがある生徒もいる。これは、自ら空きコマの時間が取れるのではなく、既に受けないといけない最低限の授業を受けていて、さらに受ける授業の定員がいっぱいの時に提案される。よって、学期の途中からクラスから落ちた生徒や変更した生徒がいてクラスの定員に空きが出た場合、途中から参加することもできた。空きコマの時間が1時間目だと登校時間がゆっくりになったり、4時間目が空きコマだと早く帰れたりという自由な時間だった。

II co-op プログラム について

これらの中でも私が一番いいと感じた授業は、「Co-operative Education Program」というものだ。このプログラムは、グレード11,12の生徒が選択することができ、実際に働いて2

つまたは4つの単位、クレジットを得る。よく聞くものであればco-op留学があるが、これとはまた別だ。このプログラムの目的として、自分の興味のある職業や分野をこのプログラムを取った全ての学生が体験することができる。生徒が学んだ知識を実際の現場で応用し、職場での実習経験を通じてこれらのクレジットを得ることができる為、将来のキャリアに役立つ実践的なスキルを学べる。また、キャリアの選択肢を模索する機会を提供し、生徒が職業に対する理解を深め、進路を具体的に考える助けとなる。

このプログラムは通常、生徒が学校で学んでいる科目や興味のある分野と関連していて、例えば、技術科目、ビジネス、ヘルスケア、芸術などの分野で学んでいる生徒が、その分野に関連する企業や団体での職場体験を行う。メリットとして、経験を通じて教室で学んだ理論を実際に応用し、実践的なスキルを身に付けることができ、体験を通じて、将来のキャリアに役立つ人脈を築くことができる。またCo-opプログラムを履修することで、必要なクレジットを取得しながら将来に役立つ経験を積むことができる。

このように、Co-op programは、学校での学びを実際の職場で活かすことで、生徒自身の興味や能力を発展させ、進路選択に対する自信を深めることができるとてもいいプログラムだった。

III 生活について

次に、カナダでの家庭や生活などについて。私がホストファミリーは、フィリピン人のホストマザーとカナダ人のホストファザーだった。ホストマザーは、パートタイムで働いていて、ホストファザーは、既に定年退職してたが、友達の手伝いと言ってたまにオフィスに行って仕事をしていた。また家族全体で自分の畑で育てた野菜や果物を売る仕事もしていた。このように他の友達の家庭を見ても、専業主婦/夫ではなく、共働きの家庭が日本よりも多く感じた。その中でも私が感じたことは、"男性も家事を手伝って当たり前"という考え方があるところだった。

実際に調べてみても、日本の男性の家事参加率は20%を切っている事に対して、海外の男性の家事参加率は米国で40%ととても高いことがわかる。ただ、もちろんホストファザーとホストマザーだけで家事をしているわけではなく、気づいた人が先にするということが多かった。また、フィリピンの方は、明るい性格で友人や周囲のコミュニティをととても大切にしている。週末などは、友達を呼んでパーティーをしたり、フィリピンの方は一家に一台カラオケと言うのが有名だが、家に本当にカラオケがあり、みんなでカラオケをした。平日でも夜ご飯時になるとホストマザーの友達が夜ご飯を作って持ってきてくれた。日本人の内気な性格とは比べ、どこでもカラオケをしたり、毎週のように友人を呼んでみんなでご飯を持ち寄りパーティーや夜ご飯会を開いたりしていたのはとても違う点だと感じた。

IV 移民について

カナダは移民大国と呼ばれるほど移民がとても多い多文化主義と二言語主義の国だ。カナダの移民の歴史として、第二次世界大戦後には荒廃したヨーロッパから多くの移民が渡って来たが、これは経済成長によって労働不足していたカナダにも好都合だった。しかし、ヨーロッパの復興が進むにつれ同地域からの移民が減少した。

また産業の発展に伴い、熟練労働者が必要となっていた。第二次世界大戦終了の頃までは、'白人優遇政策'のもと、ヨーロッパからの移民を念頭に置いて制限的な移民政策を取っていたが、ここで1967年にカナダは、'ポイント制'と呼ばれる新たな移民制度を導入した。これはカナダに永住を希望するものに対して学歴や年齢・公用語などといった運用能力を項目ごとに点数をつけ、一定の点数を超えた申請者を受け入れるという制度だ。この制度では、主観的な要素を排除し人種やエスニシティ、出身国に基づく差別的な選別が行われないという点がある。実際に導入後移民数が増加し、カナダの多様化が急速に進んだと言われている。これは今なお続いている。

また、カナダはほかの主要国に比べて経済移民を多くを多く受け入れてるだけでなく、難民の受け入れでも上位にあり、近年では毎年約25万人の移民・難民を受け入れ、2015年のシリア難民問題でも受け容れに積極的な姿勢を示した。カナダは1978年ベトナム戦争でのベトナム難民の受け入れの為、教会を中心に始まったカナダ独自の民間難民受け入れをしている。カナダは、今の世代が労働市場から離れて行く中、その穴を移民で埋めようとしている。そして、移民としてきた人が国民の4人に1人とされているように主要7カ国の中でも高い割合であることがわかる。このようにカナダは長年人口と経済拡大のために永住者の獲得に力を入れて来た。

また日本の移民政策については、日本では、2018年に首相が国会答弁において「政府としては、例えば、国民の人口に比して、一定程度の規模の外国人を家族ごと期限を設けることなく受け入れることによって国家を維持していこうとする政策については、専門的、技術的分野の外国人を積極的に受け入れることとする現在の外国人の受入れの在り方とは相容れないため、これを採ることは考えていない」と述べている。よって、日本では移民政策がないと言われている。しかし、2019年法改正により、人材が不足している産業分野での技能を有する外国人人材向けに「特定技能・実習」という新たな在留資格が創設された。人手不足の解消につながる外国人人材を積極的に受け入れるという点で、諸外国の移民政策と方向性は同じであると言える。これらの2つは、「外国人を企業で受け入れる」という点では同じだが違うところもある。特定技能とは、人材の確保が困難な一部の産業分野等における人手不足に対応するため、一定の専門性・技能を有する外国人材を即戦力としての労働者として受け入れる。これには、特定技能1号、2号があり、1号は期間が決められているが、2号の場合は更新の条件がない。また、1号の場合、家族の帯同は基本的に認められておらず、2号の場合は配偶者や子供の帯同は条件を満たせば可能。この在留資格で働くためには、日本語試験とそれぞれの分野の技能試験に合格する必要がある。試験に合格後、会社と契約し、入管に在留資格の申請をし、許可が降りれば特定技能として働くことが出来る。また、特定実習とは、現場での実習を通じて日本の様々な技術を習得した後で帰国し、その技術を母国に広めるといふ国際貢献を目的としている。

V 宗教について

私はホストファミリーと毎週日曜日の朝、教会に行っていた。日本では私は教会に行くことがなかったし、あまり見ることもなかった為、日本とカナダの考え方の違いを考えた。

カナダと日本の宗教観や価値観の違いは、カナダでは宗教が多様で信教が自由とされている。憲法によって、個人の宗教的な選択は重視されており、宗教の違いを受け入れる多文化主義の考え方が根付いている。また、世俗化も進んでおり、特に都市部では無宗教や宗教に関心がない人も増加している。そして、宗教が生活に占める割合は減少傾向にある。宗教は個人の問題として扱われ、多様な宗教的シンボルが見られるが、公的な場では宗教と政治や教育の分離が厳格に守られている。

これに対して日本では、宗教が社会生活の中心にはあまりなく、多くの人が特定の宗教を厳密に信仰しているわけではない。神道や仏教が伝統的に重要だが、これらは日常生活の儀式や年中行事の一部（初詣、祭り、葬儀など）として取り入れられることが多く、宗教的な教義よりも文化的な部分が強い。宗教そのものに対する意識は低く、宗教に対して中立的か無関心の人が多い。このように信教というより文化的な習慣として受け入れられている。日常生活において宗教はあまり大きな役割を果たさず、世俗化は古くから進んでいる。このように公共の場で宗教が大きく表れることは少なく、宗教が日常生活に直接的に影響を与えることは少ない。ただし、神社仏閣は文化遺産として重要な役割を果たしている。

このようにカナダと日本の宗教観や価値観は、多文化主義と宗教的多様性を尊重するカナダと、伝統的な文化や儀式を通じて宗教を柔軟に取り入れる日本との違いが分かりやすく見

える。カナダでは宗教が個人の選択として重要視される一方、日本では宗教が文化的・社会的な側面として存在している。

4.結論

本論で述べた通り、私はこの1年間カナダで様々な貴重な経験をしたことによって日本で生活して学ぶだけでは感じたり経験することの出来ない様々な違いを発見することが出来た。言語や文化が全く違う場所で生活することで新しいことを沢山知ることが出来、新しい発見ができた。この1年間のカナダ生活を通して、キングストンという新しい環境で、様々な国の多くの人に出会い、沢山の話を聞いて、貴重な経験だった。

5.引用

外務省. "在留資格特定技能". 外務省.

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/ca/fna/ssw/jp/index.html>, (2024-10-01)

Robin Levinson-King. "Canada: Why the country wants to bring in 1.5m immigrants by 2025". BBC. 22 November 2022. <https://www.bbc.com/news/world-us-canada-63643912>, (2024-11-01)